寄稿

―物の見方、考え方―
経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1.　まえがき

高度情報技術化社会での、SNS（Social Networking Service）、いわゆる交流サイトの導入実践によるコミュニケーション・サービス（Communication Service）が、参議員の選挙に導入された。

当初から、賛否両論があったが、高度情報技術化社会でのコミュニケーションとは一般に社会生活を営む人間同志の間に行われる知覚、感情、思考の伝達、言語、文字その他、視覚、聴覚に訴える各種のものを媒介とする手段であるが、今回の結果は「大山鳴動して鼠一匹」動かずの感がした。

それは、政党、政治家の意見が一方通行となり、有権者との間の対話による意見交換、いわゆる本音のコミュニケーションがフェイスブックやツィーター上に余りみられなかったことである。

ただ、20代の若年層の約半数がいずれかのネット情報を参考したという情報があり、無視されない時代の変化を感じた。

そこで、交流サイトSNSのこれからの問題、仏教の世界で語りつがれている教え「修因得果」、いわゆる因を修して果を得るの教えを学び、変化に対応する情報の活用の有り方を考えることにする。

好のむと好のまざるを問わず、次回の選挙では政党や候補者のサイト、プログ等は参考とされると愚考する。それは一方通行ではなく双方向通行である。

三浦雄一郎、豪太親子の80歳でのエベレスト登頂は、あらゆる研究、調査等の事前準備の成果であり、これ等についても考え学び、あわせて変化を予想し対応する英智を学ぶことにする。それは結果として「修因得果」の実践であると愚考する。

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位　法印　禅画位　奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪　（野風生）
雅号　樹泉

2.　世界最高齢80歳でエベレスト登頂

三浦雄一郎、豪太親子の快挙に学ぶ

久し振りに、努力し挑戦する世界の嬉れしいニュース、80歳という人間の限界と思われる年齢での挑戦、結果の快挙の報道に接することができた。

山岳自然信仰から山林抖擻行（悪業、穢れ、煩悩をふりはらう頭陀行、修験道へ発展）で山を歩るき深田久弥先生のご推薦で日本山岳会に入会、現在、終身会員である愚生にとって、エベレストは手の届かない夢の世界の挑戦、登頂の物語りである。

この世界最高峰（8848米）のエベレスト（Everest）の登頂に3回成功、しかも80歳という世界最高齢での快挙であり、日本人として最大の誉りである。

あらゆるスポーツのなかで、失敗のゆるされないのが登山である。失敗すれば死の世界であり、他のスポーツのようにやり直しができない真剣勝負の世界である。想定外のゆるされないのが登山である。

エベレスト登頂が如何に困難でむづかしいのか以下、その歴史等について述べることにする。

エベレストとは、ヒマラヤ山脈のイギリス人測量者、Everest, George, E（1790～1866）に因んで命名された世界最高峰（8848米）の山で、ネパールとチベットとの国境にそびえ巨大な氷河を有する高峰である。

ネパール語名サガルマーター（Sagarmata：大空の頭）、チベット語名チョモランマ（Chomolungma：大地の母神）である。1922年から各国の登山隊が登頂を試みるが失敗、1953年5月29日イギリス登山隊のヒラリー（Edomond, P. Hillary）とネパール人シェルバ（登山隊の案内人、荷役人）テンジンが初めて登頂に成功した。

イギリス登山隊の、第9次の遠征の結果であり、約31年の歳月を要した執念の挑戦の成果である。

1953年5月29日は、エリザベス女王の戴冠式の日であり、イギリス人の夢とロマンの生き方を感じる。

日本のエベレスト遠征隊は、イギリスの登頂に遅くれること約17年、松方三郎隊長のもと南東稜から登頂に1970年5月に成功、世界で6番目の登頂である。

この難攻不落のエベレストの登頂に、2003年70歳、2008年75歳、そして今回2013年80歳の3回目の挑戦を行い、それぞれを成功しているのである。

この人類史に残る挑戦は本人の常日頃の不屈の精進努力の他に、息子の豪太医師の協力や、家族の協力はさることながら囲りをとりまく人々の陰の協力があってのことと思う。人間80歳になっても数多くの人々の応援がえられる人望のある人間になりたいものである。